手作り百人一首カルタ「セレクト20」の実践研究

－ふじと台小学校・石垣中学の実験授業から－

A Practical Study of Using Hand-made *Hyakunin-isshu* Playing Cards Called “Select 20” in Class
－Experimental Teaching of Japanese Language at Fujitodai Elementary School and Ishigaki Junior High School－

菊川　恵三　　中井　　萌
KIKUKAWA　Keizo　　NAKAI　Megumi
（和歌山大学教育学部）　（和歌山大学教育学部大学院生）

本稿は我々教育学部国語科で開発した新教材、手作り百人一首「セレクト20」を用いた実験授業を通しての考察である。和歌山市内の小学校と有田川町立の中学校でカルタ取り・カルタ作り・色紙作りの授業を実施した。その際の児童・生徒のアンケートを基に、小学校と中学校という校種の違いが、どのような違いとして現れるのかを考え、今後のどのように活用すべきかを考えた。

その結果、ゲーム性の高いカルタ取りについては共に高い関心を示すものの、カルタ作りになると男子中学生には興味を持続できないケースがでてくること。好きな歌を捜す際に、小学生は名詞（富士山・花など）を中心として歌中のことばを手掛かりにするのに対し、中学生女子では歌全体（恋歌）への関心を持つことがわかった。

キーワード：百人一首、カルタ、セレクト20、色紙

１．はじめに

百人一首カルタを古典入門の教材として使えないか、そんな思いから学生たちと手作りカルタを試みたのは10年ほど前のことになる。これは、TOSSの「五色百人一首」にヒントを得たもので、20枚一組で１対１のカルタ取りを通して百人一首に親しむ教材である。短時間で終わるので、繰り返し対戦することができ、歌数も20と少ないので歌の暗記も容易である。

ただ、市販された「五色百人一首」では百枚と多く、名歌だけを選ぶわけにはいかない。そこで、ボール紙に千代紙と歌の上の句・下の句を貼り付けて手作りでカードを作り、「セレクト20」と名づけた。これなら、とりあえずは20首からスタートでき、好きな歌を選ぶこともできる。まずは国語の学生から始め、小学校国語を履修する大学生へ、やがて実際の小学校、中学校で実験授業をしていった。このように、実際の授業での反応を確かめながら、百人一首カルタから始める古典教育の模索を続け、そのアウトラインを拙稿「百人一首カルタを利用した古典学習」[1)]にまとめた。

ちょうど新学習指導要領に「伝統的言語文化」が取り入れられたこともあり、学校現場でも百人一首カルタについての関心は高まっている。近年、百人一首カルタの特集を組む国語教育関係雑誌[2)]が現れたことからも関心の高さをうかがわせる。

本稿では、昨年度の実験授業の中から、和歌山市立ふじと台小学校と有田川町立石垣中学での実践とアンケートを基に、小学生と中学生で何が共通し、何が異なるのかを考えてみたい。

今回は①カルタ取り、②カルタ作り、③百人一首色紙を中心に授業を実施した。①・②は「セレクト20」を用いたもので、これは、百人一首の中からさらに20首を撰歌したものを用いた。

③の色紙は、自分の好きな歌一首を書いたものを色紙に貼り、そこにさまざまに切り取った千代紙を貼って飾り付けたものである（P163参照）。「書写」と「図工／美術」とをコラボさせたものとして、新しく開発した。カルタで終わるのではなく、さまざまに発展させることで「学び」につなげていきたいと考えている。

ただ、アンケートではこの③についての項目を準備していなかったので、児童・生徒の感想を十分にひろいあげることはできなかった。

２．ふじと台小学校における実践

2-1．授業の概要

はじめに、和歌山市立ふじと台小学校の４年生３クラスで行った百人一首「セレクト20」の実験授業とその結果について述べていく。当該のふじと台小学校は平成23年に新興住宅地に設立された新設校であり、児童数は770名を超える。サラリーマン世帯が多くを占め

るニュータウンであるため、保護者の教育に対する関心も高い。今回は、平成26年１月17日と２月27日の２度にわたり、大学生による実験授業を行った。

①第１回（１月17日）

当日は２時間連続で授業を行った。１時間目には、百人一首や和歌について簡単に説明をしたうえで、セレクト20を用いたカルタ大会を行った。一回戦は隣同士で、二回戦以降は勝った者、負けた者同士でそれぞれペアを組ませ、三回戦まで行った。

２時間目には、児童自身にセレクト20を制作させる活動を行った。厚紙や千代紙などの材料を持参し、作り方を説明しながら１枚を全員で作った後は個人作業に入った。

②第２回（２月27日）

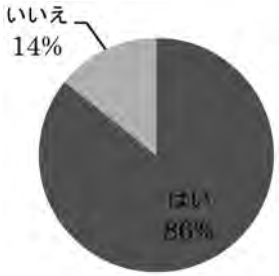
ここでは色紙を作る活動をした。これは、それぞれがセレクト20から好きな歌を一首選び、それを小筆で書いたものを色画用紙に貼りつけ、飾り紙を使って飾り付けた。

ただし、好きな歌一首を選んで小筆で書く活動は、この授業までに各学級の担任の先生によって指導されている。

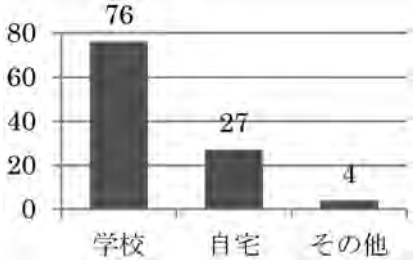
2-2．アンケートの内容と結果

先に述べた２回の授業の後に、各クラスの児童を対象に簡単なアンケートをとった。回答者は各クラス35名で、合計105名である。ここでは、アンケート結果を見ながら、セレクト20を用いた百人一首の授業が児童にどのように受け入れられているかを見ていきたい。

【1】あなたはこれまで百人一首カルタをしたことがありましたか。

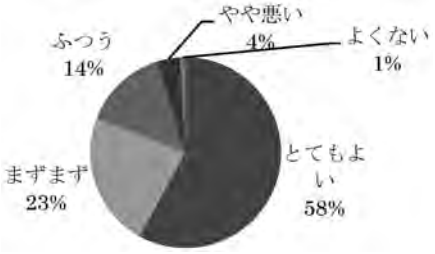


【1-2】「はい」と答えた人に質問です。どこでしましたか。



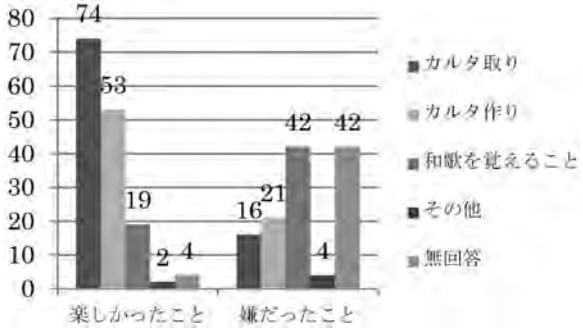
この設問でみたかったのは、授業の前段階でどれだけの児童が百人一首カルタに親しんでいるかということである。児童は百人一首カルタに取り組んだ経験はあるが、これは、児童の大部分が３年次に百人一首の授業をしているという背景があるためだ。また、「いいえ」と答えている児童については、「百人一首カルタの経験」を「セレクト20の経験」ととらえてしまった可能性が高い。自宅や祖母・祖父宅で取り組んだ経験がある児童は全体の30％にも満たない。

【2】今回やった百人一首カルタは楽しかったですか。（５段階）



ここでは、セレクト20を使って行った百人一首カルタの感想を問う質問を立てた。「とてもよい」「まずまず」と回答した児童数を合わせると約80％にあたることから、セレクト20実践は児童にとって非常に好意的に受け入れられていることが分かる。これは、当日のカルタ大会が大いに盛り上がったことからも予想できた。

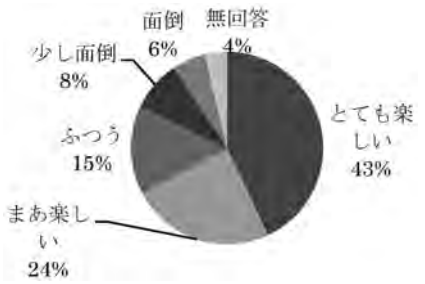
【3】次の活動の中で、楽しかったこと嫌だったことを教えてください。



この設問はいずれも複数回答可としている。「楽しかったこと」の項目では「カルタ取り」が最も票を集めており、「カルタ作り」も全体の50％程度の児童が楽しかったと答えている。「その他」の２票はいずれも、２回目の実践で行った色紙作りに対する票である。

それに対して「嫌だったこと」の項目では、「和歌を覚えること」と「無回答」が同票で最も高い。児童の中には、和歌を覚えるということに対して抵抗があることがうかがえる。

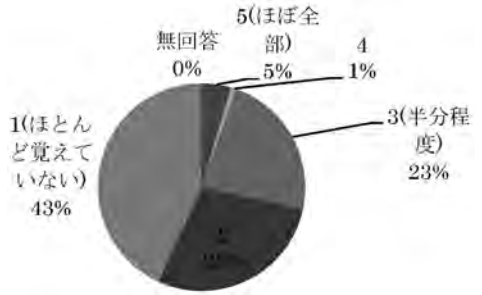
【4】セレクト20を作るのは楽しかったですか。



この設問は、カルタ制作に関する問いである。厚紙を千代紙で覆うように貼りつけ、そこにシートから切り出した下の句カードを貼り、裏に上の句を貼るというだけの簡単な作業で、小学校の児童にも決して難しいものではない。好きな柄の千代紙を選ぶことが楽しく、自分の手を使って作ったカルタが自分専用のものになるというのは児童にとっても嬉しいことだったようで、60%以上の児童が「楽しかった」と答えている。

しかし、児童にとって「残りは宿題」というのは苦痛でもあったようだ。手先の不器用な児童は作るペースも遅く、他の児童に比べて多くの枚数が宿題になってしまったのか、「面倒」と答える児童も14%いた。

【5】セレクト20の和歌をいくつか覚えましたか。上の句を聞いて下の句が判るのはいくつありますか。



「５」～「３」と答えた児童を合わせても30%に満たず、「覚えていない」と自覚している児童がほとんどだった。しかし、これを額面通りに受け取ることはできない。第２回の授業の冒頭でカルタ取りをしたところ、上の句でとれる歌がある児童が多数いた。授業者の印象としては、アンケート結果よりも「覚えている」と言える児童は多いように思える。

またこれは、第１回目から２回目までの２ヶ月で、クラスでどの程度「セレクト20」に取り組んだかが影響していると考えられる。[3)]

【6】好きになった歌、楽しかったことなど自由に感想を書いてください。

最後の設問では、空欄を設け、自由記述を促した。「覚えるのが難しかった」「楽しく覚えられてよかった」など書いている児童と、好きになった歌を書いている児童が多数の中、色紙作りについて書いている児童もいた。「好きな歌」については、「1-3. 歌への関心について」で述べるとして、ここでは色紙作りについての感想を見ておこう。

色紙作りは前述のように、１時間目に担任の先生の指導で書写の時間に小筆を用いて好きな歌を書くという活動を行った。２時間目は大学生の指導により、好きな歌を書いた紙を色画用紙に貼りつけ、飾り紙を選んで切り貼りするという活動をした。

この時の制作の参考として、大学生が作った色紙を前に並べ、「自分が選んだ歌に合わせて」作るよう指導した。しかし、この実践では、選んだ和歌から図案を創るのが難しかったようで、「八重桜」「富士」「山鳥の尾」といった、知っている単語に反応して作品を制作しているようであった。以下にその様子を掲げておく。

色紙作りに取り組む児童

完成した色紙。様々な工夫が凝らされる

2-3. 歌への関心について

ここでは、アンケートの自由記述欄に書かれた「好きな歌」と、四年三組36名が作成した色紙に選ばれた歌を基に、児童の歌に対する関心について考察していく。

【アンケート自由記述欄の「好きな歌」】
１位　田子の浦に・足引きの（５名）
２位　春過ぎて・天つ風（４名）
３位　天の原・いにしへの（３名）
４位　花の色は・村雨の・滝の音は・人はいさ（２名）
５位　逢ひ見ての・夜をこめて・月見れば・有明の（１名）

【色紙作りに選んだ歌】
１位　春過ぎて（９名）
２位　いにしへの（７名）
３位　田子の浦に（５名）
４位　足引きの（４名）
５位　天の原・花の色は・天つ風（２名）

上位に共通するのは、「春過ぎて」「足引きの」「田子の浦に」「いにしへの」である。先に挙げた３首はセレクト20を一覧にした時、冒頭にならぶ①②③である。児童らが好きな歌を一首選ぶときに、一覧の前の方だけに目を通して決めたようだ。また色紙作りの際、どれを選んでいいかわからなかった児童が、とりあえず一首目を選択したという場合もあるだろう。

もうひとつ考えられる特徴は、四年生の児童にも分かりやすく、イメージがしやすい単語の入った歌が選ばれていることである。「白たへの衣（①春過ぎて）」や「山鳥の尾（②足引きの）」、「富士」や「雪」（③田子の浦に）、「月（④天の原）」、「八重桜（⑮いにしへの）」といった平易な単語があれば、それを手がかりに色紙を作ることができるためだろう。

どちらの項目でも選ばれていないのは「由良の門を」「瀬を早み」「玉の緒よ」の三首である。これらはいずれも恋の歌であり、意味の難しい古語、曖昧でイメージのしづらい単語などが含まれている。

３．石垣中学校における実践

3-1．授業の概要

ここでは、有田川町立石垣中学校の１年生21名、２年生24名、３年生19名の各１クラスを対象に行った実践について述べていく。石垣中学校は有田川流域に位置し、自然に恵まれた土地に建てられた学校で、１学年１学級といった少ない生徒数が特徴である。この中学校の生徒は「平成25年度全国学力・学習状況調査」に於いて優秀な成績をあげており[4]、授業態度もまじめな生徒が多い。今回は、平成25年12月18日と２月24日の２回にわたって、大学生による出前授業を実施した。

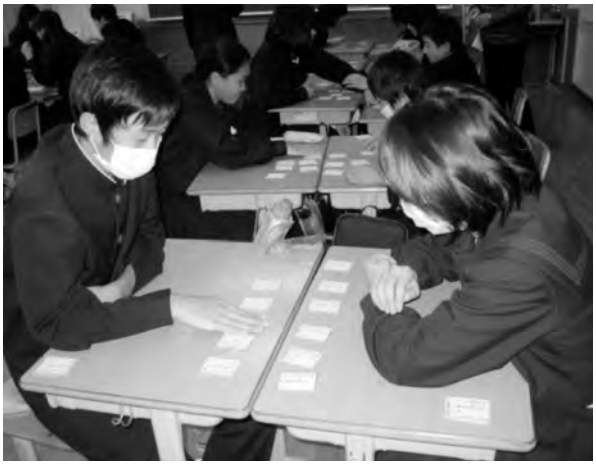
①第１回（12月18日）

それぞれの学年で、授業者を変えて１時間ずつ授業を行った。授業のはじめにカルタ取り大会を２～３回行い、15分程度の解説の後、制作活動を行った。１、３年生では掛詞について、２年生では字余りについての解説を行った。制作活動としては、１、２年生でマイカルタの制作、３年生で色紙作りを行った。但し、ここでの色紙は小筆を使わず、鉛筆やサインペンを使って、「競書会」のマスつき用紙に和歌を書いた。

②第２回（２月24日）

第１回と同じ授業者が担当して授業を行った。初めに、カルタ取り大会を２回行い、その後は朗詠の練習をさせた。

朗詠については、はじめにカルタ取り大会で勝ち残った生徒に教えた。その後、４～５名のグループを組み、そこにカルタ取り大会の勝者を１人ずつ配置し、グループで練習をさせた。その後、大学生３人による『平家物語』の群読を披露した。朗詠の活動についてはアンケートに項目を設けていないので、今回は触れないこととする。

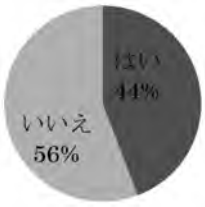


中学生もカルタ取りに集中

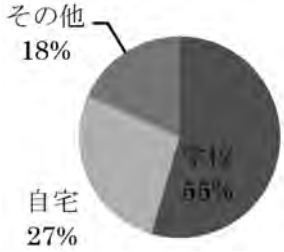
3-2．アンケートの内容と結果

こちらでも、ふじと台小学校で実施したものと同じ内容のアンケートを行った。回答者は１年生21名、２年生23名、３年生17名の合計61名。ここではアンケートから、石垣中学校の生徒に「セレクト20」がどのように受け入れられたのか、小学校の児童との間にどのような違いがあるのかを見ていこう。

【1】あなたはこれまで百人一首カルタをしたことがありましたか。

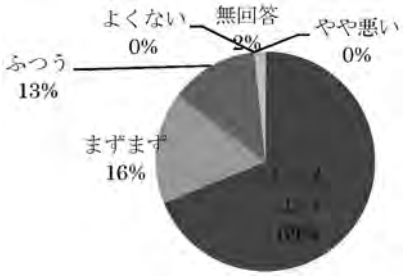


【1-2】「はい」と答えた人に質問です。どこでしましたか。



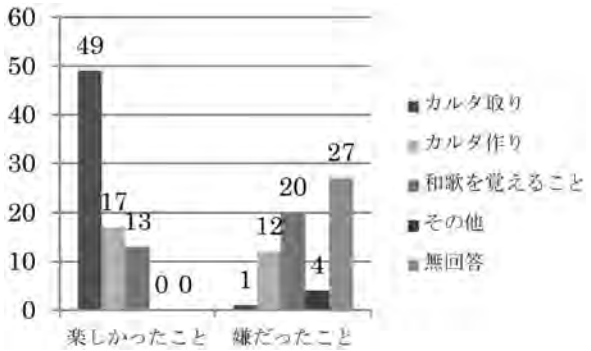
全学年のデータを見ると、「はい」が４割、「いいえ」が６割という結果になっているが、これは学年によって大きく結果が違っていた。３年生は中学校１年次に百人一首の経験があるため、「はい」が100％という結果になっている。対照的に２年生では「はい」と答えた生徒は１名で、この生徒は公民館で経験したと答えた。１年生は２年生と３年生の中間で、約４割が「はい」と答え、小学校もしくは自宅で百人一首に取り組んでいるようである。ふじと台小学校と比較すると、自宅や公民館で百人一首に触れる機会が多いのは、年代と地域による特徴であると言えるだろう。

【2】今回やった百人一首カルタは楽しかったですか。（５段階）



ここでは「とてもよい」「まずまず」と答えた生徒は合わせて85％に上り、小学生よりも高い結果となった。この設問によって、今回行った「セレクト20」を用いた百人一首授業が中学生にも好意的に受け入れられていることがわかった。

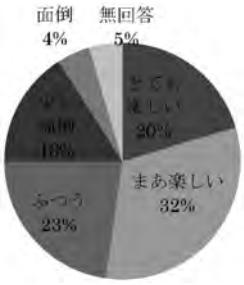
【3】次の活動の中で、楽しかったことといやだったことを教えてください。



「楽しかったこと」の項目では、やはり「カルタ取り」が人気で、大差をつけて「カルタ作り」「和歌を覚えること」が続く。「その他」は０票で、色紙作りに関しての感想はなかった。

それに対して「いやだったこと」の項目では、「カルタ作り」が高く、12票であることが目についた。「楽しかったこと」で「カルタ作り」と答えた17票とは５票しか違わない。これについては次の設問で述べることとする。また、「その他」が指しているのはすべて「和歌の朗詠」であった。

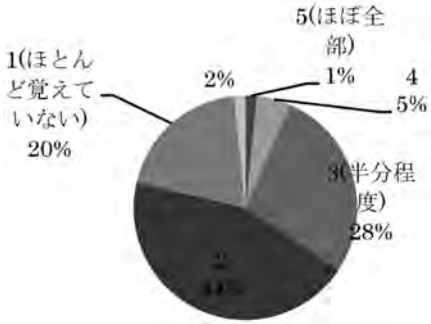
【4】セレクト20を作るのは楽しかったですか。



ここまでは全学年のデータを使ってきたが、「セレクト20」の制作は１、２年生のみで行ったため、１、２年生のデータをもとに考えていく。「とても楽しい」「まあ楽しい」を合わせると52％で、全体の半分以上が制作活動を楽しいと感じている。それに対して「少し面倒」「面倒」を合わせると20％にのぼり、これは小学校の14％と比べるとやや高い。

中学生の場合、千代紙を選ぶ楽しさや工作の楽しさはしだいに女子生徒特有のものになっていき、男子生徒にとってカルタ作りを20回繰り返す単純作業は退屈と感じられる傾向がうかがえる。

【5】セレクト20の和歌をいくつか覚えましたか。上の句を聞いて下の句が判るのはいくつありますか。



小学校の結果をみると、「５（ほぼ全部）」「４」「３（半分程度）」と答えた児童を全部合わせても30％に満たなかったのに対して、中学校では「３（半分程度）」と答えた生徒だけでもおよそ30％に及ぶ結果となった。しかし、「５（ほぼ全部）」や「４」と答えた生徒は少なかった。授業の様子を見ていると、小学校の場合と同じく、第２回の授業のときにはほぼ全部覚えて上の句でとる生徒は各クラスに数名いた。また、ほとんどの生徒が半分程度の歌を覚えていて、下の句を詠む前に「はい」という声が多く挙がっていた。

【6】好きになった歌、楽しかったことなど自由に感想を書いてください。

自由記述欄に書いている内容を見てみると、「カルタ取り」についての感想が多くを占めていた。特に、「覚えた歌が詠まれると嬉しかった」という感想と、「もう少し数を増やしてやってみたい」という意見が多かった。このことから、「セレクト20」を通して百人一首に興味を持つ生徒が育つ可能性があると言えるだろう。

また、１、２年生では、大学生３人による『平家物語』の群読に対しての反響もあった。これを始まりとして、古典作品の群読や和歌の群詠につなげていくこともできるだろう。対して３年生では、和歌の朗詠についての感想が多くを占めた。

3-3．歌への関心について

ここでは、アンケートの自由記述欄に書かれた「好きな歌」をもとに、中学校の生徒の歌への関心について考察し、小学校児童との違いを考えていく。

まず、アンケートに書かれた「好きな歌」は次のとおりである。

１位（４名）	有明の（恋）
同率２位（２名）	田子の浦に（冬）
	逢ひ見ての（恋）
	いにしへの（春）
同率３位（１名）	春過ぎて（夏）
	天の原（羇旅）
	人はいさ（春）
	忍ぶれど（恋）
	由良の門を（恋）
	村雨の（秋）
	来ぬ人を（恋）

これらの特徴を見てみると、小学校で選ばれた歌に比べて恋の歌が圧倒的に多いことに気がつく。小学校では、知っている単語に反応したり「ながながし」など、言葉のおもしろさに引き付けられて好きな歌を選んでいたようであった。対して中学校では、国語の授業で古典教材を取り扱っているためか、歌の意味が推測できる力が付いている。そのため、中学生にも共感のしやすい恋の歌が多く選ばれているのだろう。恋の歌の中でも「瀬をはやみ」「玉の緒よ」といった難しい言葉を含む歌よりも、「忍ぶれど」「逢ひ見ての」のような、平易な言葉の歌のほうが生徒にとっては理解がしやすいようである。

また、色紙作りについては３年生でしか行っていないが、そこでも恋の歌を選ぶ生徒が多かった。特に、小学校では「山鳥の尾」や「月」をかたどった飾り紙を貼り付けるという形が主であったのに対し、中学校では恋の歌を選び、ハートマークや「LOVE」の文字のかたちに切り抜いた紙を貼りつける形が多かった。

色紙の清書に取り組む石垣中学校の３年生

また、四季の歌を選んだ生徒に関しては、単語に反応してその形を切り抜くのではなく、歌の情景に合わせて飾り紙の色を選び、抽象的な形に切り抜いてデザインをした作品が多くみられた。これらは中学生の特徴であると言ってよいだろう。

４．まとめ

カルタ取りとカルタ作り

今回の「セレクト20」を用いた実験授業では、小学生と中学生を対象にほとんど同じ内容の授業を行った。カルタ取りから始め、マイカルタを作ったのちに、好きな歌一首を選んで色紙作りをするという内容である。

カルタ取りは小学校・中学校のいずれも大いに盛り上がり、「取った！」「この札狙っていたのに！」といった声で下の句の朗詠が聞こえなくなってしまうほど楽しんでいた。また、アンケートでも「今回の百人一首の授業は楽しかった」と答えた児童・生徒がそれぞれ80％であり、「セレクト20」授業は、小学生だけでなく、中学校の生徒たちにも十分に受け入れられることがわかった。

しかし、小学生と中学生ではカルタに対する姿勢に違いがみられる部分もあった。それは主にカルタ作りや色紙作りといった手作業の入る活動で見ることができる。

カルタ作りの場面では、小学校では女子も男子も同じように自分の作業に没頭し、マイカルタが一枚一枚完成していくことに手ごたえと喜びを感じているようだった。同じ作業を繰り返すことにも抵抗はほとんどなく、下の句シートもその都度切り離しては貼るという作り方をしている児童が多い。

それに対して中学校の生徒たちは、周りの生徒と確認をしたり会話を交わしながら作っていく様子が見られた。千代紙を選ぶ楽しさなどは一部の男子生徒にはあまり見られず、同じ柄の千代紙ばかりを選んだり、柄をあまり見ることなく取っていくようだった。また、千代紙を厚紙に貼る作業を20枚分行ってから、シートから下の句のカードを切り取るという作業に移る生徒がほとんどで、どの生徒にも「早く作るため」の工夫がみられた。アンケートからは中学生になると、同じ作業を20回繰り返すことを「面倒だ」と感じる生徒も一定数いることがわかる。

色紙作りと歌の理解

また、色紙作りの様子を見ていると、歌に対する関心の持ち方に違いが見て取れた。小学校の児童たちは、色紙に書く歌を選ぶ際に「知っている単語が入っている歌」を選ぶ傾向がある。そして色紙の図案も、その単語に合わせた形に切り、貼りつけていくのだ。

中学校の生徒たちの色紙作りの手順は、小学生とは対照的である。歌を選ぶときは単語に反応するのではなく、歌全体の意味を自分なりに想像したり、知っている歌についてはそれを思い出して選ぶのである。そして、その歌のイメージに合わせて飾り紙の色を選び、これらを自分なりにデザインして貼りつけていくのだ。

知っている単語や響きのおもしろいことばに注目する段階から、歌全体の意味をとらえ、情景や心情をイメージして色に変換する段階へと変わっていく。これは明らかに小学生と中学生の発達段階による感性の差であって、カルタ取りをしているだけでは見えなかったものである。「好きな歌」を選ぶという行動と、それを視覚化するという作業の中でこそ発見できた特徴であると言えるだろう。今後、色紙作りの実践をしていく中で、これらの傾向に合わせて見本を選び、説明をしていく。これによって児童・生徒の作品に対する意識がどう動いていくかが課題である。

また、今回カルタ取り・カルタ作り・色紙作りの実践をした学年では、和歌の鑑賞と朗詠の授業にも取り組んでいく。百人一首を「遊び」から「学習」へと移り変わっていく中で、児童・生徒の興味の対象がどのように変わっていくかを見ていきたい。

朗詠・群読

また、和歌の朗詠を通して、言葉の響きやリズムを体感し、そこから群読につなげることを柱の一つにしてみたい。というのも、ここでは触れなかったものの、和歌山大学教育学部附属小学校で行った実験授業の中で、女子大学生４人が声を合わせて和歌の群詠を行ったところ、児童達からは拍手が起こり、想像以上の反響があったからだ。さらに、今回の石垣中学校の第２回授業では男子大学生３人で『平家物語』の群読を行った。ここでも拍手が起こり、アンケートにも「かっこよかった」との感想がいくつかあったことから、群詠や群読を行うためのきっかけづくりができたのではないか。

今回の石垣中学校の授業でも朗詠については指導したものの、１時間のうち、カルタ取り大会の後の短い時間で行ったため、十分な指導はできなかった。生徒たちもよくわからないまま終わってしまったように思える。中学生が、恥ずかしがらずに声を出すためにも、数名で一緒に取り組む百人一首の群詠は効果を発揮すると予想する。

また、和歌に限らず、教科書に載せられている『枕草子』や『平家物語』、『徒然草』などの散文にも群読を取り入れる方向で考えていく。これらの作品は時代や文体も様々であるため、音読することによって感じられるリズムもまた様々である。さらに、作品を変えることにより群読に工夫ができる可能性も広がるだろう。

注

1）菊川恵三「百人一首カルタを利用した古典学習」（『和歌山大学教育学部紀要－教育科学－』56集、2006）

2）『教育科学　国語教育』（768号、2013年12月）

3）授業で何度もカルタを行ったクラスもあれば、この間一度もカルタをしなかったクラスもあった。
担任の先生方の、百人一首に対する温度差が如実に表れた。

4）石垣中学校HP
（http://www.aridagawa-town.ed.jp/ishigakijh/）
平成25年10月　学校だより第７号より

本稿は科学研究費　基盤（C）「手作り百人一首「セレクト20」を使った小学校国語科の授業開発」（14701-06-1-4003-2002）の一部である。